
無関心

urara

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心

【コード】

N0441C

【作者名】

urara

【あらすじ】

周囲の事に興味を持たない船戸。そんな彼女に転機が訪れる。

うちの学校はアルバイト禁止だったりする。でも、部活もやっていない私は夏休み暇だしお金も欲しいしで、隠れてファミレスの厨房でアルバイトをしている。厨房なら先生がファミレスに来てもばれる可能性は低い。しかし、この厨房が、なかなか大変なんだな。スープ等の煮込み担当になった日には、汗だくだく。

アルバイトが終わり、自転車で家路に着く。ファミレスを出ると、太陽とアスファルトからの容赦ない熱で空気がむっとしていて、

厨房にいても暑い。

外に出ればなお暑い。

夏休み中に、ダイエットもできてしまいそうだ。

お金がもらえて、ダイエットもできて、ラッキーなのか？

暑い中、私は自転車を漕ぐ。

自転車を漕ぐという動作のおかげで、体内熱は更に上昇する。

顔からは汗が滴り落ち、顔は真っ赤になっているのが自分でもよくわかる。

傍から見たら、きつとすごい形相に違いない。

家に着き、麦茶を一気飲みしてしばらくボーっとしていた。体内熱が下がってきた頃、家の電話が鳴った。

「はい。船戸です。」

「あの、川崎です。陽菜さんいますか？」

「私ですけど」

川崎？

聞いたことない名前。

聞いたことのない声。

唯一相手が“男”であることは声からわかった。

「さつき、レンタルビデオ屋の前を自転車で通ったでしょ？俺、見てたんだ。」

「はあ。」

ゲゲ。

アルバイトで疲れ、自転車漕いで、汗たらして顔真っ赤にしていた姿を見られてたのかあ。

恥ずかしいなあ。

この人は一体何の用なんだろう？

セールスか何かか？

でも声の感じだと若いみたいだし……。

「もうすぐ夏休みも終わるね。」

「はあ。」

「陽菜さん、付き合っている人いる？」

「いませんけど。」

答えてむなしくなってしまった。

電話さつさと切りたいなあ。

どうやって切るうか……。

「夏休みも終わるってことで、告白しようと思って。付き合っても
られないかな？」

はあ〜？

“夏休みが終わるから”っていう理由で告白って、聞いたことないんだけど。
クリスマスやバレンタインみたいなイベント性は、『夏休み終了』にはないよねえ？

わかった！

これは罰ゲームか。
きつと友だちと何かやって負けて『名簿に目を瞑って指差して、指差した相手に告白する』という罰ゲームになったに違いない。
でなければ、とうてい理解できない状況だ。

私は顔の造作がいいわけではない。

スタイルだって、上半身に比べ下腹から太ももにかけて太くて全体のバランスが悪い。

性格も特に良くもなく、悪くもなくだと思うし。

頭だって超ど真ん中、中間をさまよっているだけだし。

部活をやっている功績を残して目立っているわけでもないし。

お洒落が上手で、自分の見せ方が上手なわけでもない。

男子に好かれるような要素は全くもって持ち合わせていない。

「あの、私、貴方のこと知らないし。知らない人とは付き合えないので……。」

次の瞬間、受話器から非難めいた声が聞こえてきた。

「あのさ、去年同じクラスだった川崎だけど、わからない？」

ええ〜！！

同じクラス〜！！

ひえ〜。

私はもともと人の名前を覚えるのが大の苦手だ。
クラスメイトの名前なんて、毎年全員覚えてない。
いつも仲良くしている友だちの名前しか記憶に残らない。

その友だちでさえ、3年も音沙汰無い状態になると、フルネーム言えなくなるようなタイプなのだ。

名前が記憶に残らないから、顔などそういうことも記憶に残らない。
とはいえ、去年同じクラスだったのにも関わらず覚えていないというのは、一般的にとってもなく失礼なことだというのは、わかる。

「ああ！川崎君かあ！」

とりあえずわかったフリをする。

「わかってくれた？」

声に少し疑いの色が混じっているような気がするんですけど……。

「でも、ごめんなさい。今は誰とも付き合っ気がないので……。」
「……。そっか。わかった。それじゃ。」

川崎君の声が少しばかり小さくなった気がした。

夏休み明け、親友の由紀にこの話をした。

私の中では『罰ゲームの標的だった』以外の認識はなかったの
で、笑い話として話をしていた。

笑ってくれると思ったのに、由紀は笑わなかった。

かわりに盛大なため息をついて頭を抱え込んでしまった。

「あれ？面白くなかった？」

「あんだね〜。ほんつとに川崎君が誰だかわからないの？」

「？知らないよ。由紀知ってるの？すごいね。うちの学校ってさ、1学年10クラスもあるじゃん。同じクラスでもないのによく知ってるね。」

「っていうか、あんたが知らなさすぎるの！！第一クラスメイトさえ全員覚えてないってどういうこと？私も来年同じクラスになっとなかったら忘れられそうだね・・・。」

「やだなあ。由紀は忘れるわけないじゃん。大丈夫だよあ。」

なんだ。

私が由紀を忘れちゃうかもしれないってことが心配だったのか。

由紀、可愛いなあ。

「陽菜、にやけてるけど、多分陽菜が考えていることは見当違いだから。」

え、そうなの？

じゃ、なんでさっきからため息ばかりなのさ〜。

「同学年の川崎君っていったら、理系クラスで水泳部の川崎君しかいないでしょ。学校中で有名じゃない。水泳で全国大会まで行ったって。」

「はあ。そうなんだ。まるで知らなかったよ。だって水泳興味ないもん。」

「陽菜って興味ないことはほんと無頓着だよな。噂話もまるつきり知らないし。陽菜さあ、もっと周りに興味持ちなさいよね。」

チャイムがなり、この話は由紀からの叱咤で幕を閉じた。

川崎っていう人は有名人だったのか・・・。
きつといつも周りから騒がれてきたんだろうな。
誰もが自分を知っていて当然、みたいな状況だったんだろうな。
それなのに、私に“川崎君を知らないの”って言われたんだよね。
傷つけたかなあ。
ま、お互い様だよな。
私だって罰ゲームの標的にされたわけだし。

私はその日の帰り下駄箱に向かっていた。
目の前を歩く男子生徒のカバンからタオルが落ちた。

「タオル落ちましたよ。」

そう言っただけは拾い、男子生徒に声をかけた。
男子生徒は振り返り、私を見て、凍りついたように止まった。

「?どうぞ。」

私はその視線を訝しく思いながらもタオルを渡し、男子生徒の横を
通り抜けようとした。

「やっぱり! わかってなかっただろ。」

いきなり腕をつかまれた。

「は? あの、何?」

「俺、夏休み終わる前に電話した、川崎だけだ。」

え、え、えー!!!

やばい。

背中に冷や汗が流れた気がする。
思わず視線が泳いでしまう。

「やっぱり俺が誰だかわかってなかったんでしょ。それなのにわかったフリをした。ひでえなあ。元同級生を覚えてないっていうのも、なあ……。」

なんだかものすごく傷ついた顔してるような気が……。
でも、でも、まてよ？

だって川崎君だって私を利用しようとしたじゃん！
そうだ、それをはつきり言ってあげなきゃ。

「覚えてなかったことも、わかったフリをしたことも、ごめんなさい。でも川崎君、私を利用しようとしたでしょ？だからお互い様ってことで……。」

「？利用ってなんのこと？」
「またまた」。わかってるって。私に告白なんて、罰ゲームかなんかでしょ？」

私の腕を掴んでいた川崎君の手が力なく離れた。

「あのさ、なんでそう思うの？」

川崎君は下を向き、首の後ろを手で押さえていた。

「だって夏休みが終わるからって理由で告白なんて聞いたことないし。それに私のこと好きになるなんて到底理解できない。あの日自転車を漕ぐ私を見たって言ってたでしょ？あの時の私ってすごい形相じゃなかった？絶対恋に落ちるような顔じゃないと思う。」

川崎君は顔を上げて、フッと笑った。

「夏休みが終わるっていうのは、俺にとって大事な区切りだったんだ。俺の目指していた大きな大会も終わるし。告白するのって勇気いるだろ？だから何かしらの区切りが自分の中にほしかったんだ。それに、あの日、自転車を漕ぐ君を見て恋に落ちたわけじゃない。前から好きで、たまたま告白しようと思った日に君を見かけたんだ。暑い中脇目もふらずに必至に自転車漕いでいる君は、別にすごい形相ではなかった。以上、わかってくれた？」

「うーん、でも何で私に好意を？そこが一番理解できないんだよね。」

「俺さ中学から周りから騒がれてたんだ。水泳で良い成績を残すことを求められて。近寄ってくる女子は本当に俺に興味があるのか、それとも成績を残しているから興味を持ったのかわからなかった。俺に向けてくる視線がいつも何かを期待していて、重かった。でも君は違った。去年同じクラスになって、覚えていないんだろうけど同じ係りをやったことがあるんだ。俺に向けてくる視線には何の期待もないし、過大評価もされていなかった。君が隣にいるとすごく安らぎを感じたんだ。君、周りに無頓着なところがあるだろ？俺にはそれがすごく居心地良かったんだ。」

そんなもんなのかねえ。

目の前で真剣な眼差しを向けてくる川崎君が、そんなにすごい人には見えなかった。

むしろ小さな子どもに見えた。

この人を守ってあげなきゃいけない。
なぜかこの時そう強く思った。

「もう一度、ちゃんと告白させてくれないかな。俺、君の事がずっ

と好きで、君と付き合いたいんだ。君は俺のこと知らないだろうけど、俺は少しは知ってる。お互いこれから少しずつ知っていくって言うのはどうだろう?」

「そうだね。私、たった今川崎君のこともっと知りたいって思った。

」

川崎君がおもちゃを買ってもらった子どものように笑った。

私の心が動いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441c/>

無関心

2010年10月28日08時47分発行